

# 狩野探幽筆「源氏絵」の作画形式に見る土佐派「源氏絵」の影響

大阪芸術大学 美術学科 教授 河田 昌之

源氏物語と絵画の関連は、この物語が作られた平安時代にすでに絵画化されていたことが記録類から知られており、早くからあった。それらは絵巻や色紙の小画面が大半である。襖や屏風といった大画面の作品は近世以降に多く作られた。やまと絵の技法で描く土佐派はもちろんのこと、漢画の技法を専らとする狩野派の絵師の参加もあり、流派の特徴を生かした源氏絵が作られた。

狩野派による源氏絵としては、狩野探幽が描いた源氏絵が著名である。それは宮内庁三ノ丸尚蔵館に蔵される「源氏物語図屏風」で6曲1双に54場面を描く。27場面を左右隻に分ち、向かって右端の第1扇上から下にかけて章段順に配置する。左隻の第6扇下方に探幽の落款と印章を備え、探幽の作品であることが確かめられる。

探幽が晩年に用いた「筆峯」印章が押された「源氏物語画帖」が和泉市久保惣記念美術館に蔵される。54章段から各1場面が選ばれ54場面構成された画帖である。その作風を見ると、全ての場面を探幽が描いたとすることはできないが、構図は宮内庁三ノ丸尚蔵館蔵の「源氏物語図屏風」と類似する場面が含まれ、探幽の源氏絵の構図が用いられている作品であるところから、この画帖は狩野派による小画面の探幽様源氏絵として捉えられる。

宮内庁三ノ丸尚蔵館蔵の「源氏物語図屏風」を大画面の作例とし、和泉市久保惣記念美術館蔵の「源氏物語画帖」を小画面の作例として、比較の対象とした。

一方、土佐派の絵師による源氏絵の代表は土佐光吉の描いた色紙型源氏絵である。光吉は室町時代からの土佐派の絵師による色紙型の源氏絵を集大成した。いわば光吉源氏絵と呼びうる土佐派源氏絵は、光吉の子光則を筆頭にその子光起他の土佐派絵師に受け継がれ、さらに住吉派として土佐派から分派した住吉如慶や具慶の源氏絵にも影響を与えた。光吉の源氏絵は、和泉市久保惣記念美術館や京都国立博物館にそれぞれ蔵される色紙型源氏絵である「源氏物語手鑑」や「源氏物語画帖」がその代表である。

光吉と探幽の作品はほぼ半世紀の隔りがある。制作年代の差にも関わらず、探幽の源氏絵に光吉の源氏絵の影響を見ることができるものがある。その影響は54章段全場面に当てはまるものではないが、探幽筆と探幽様式の源氏絵の場面構成において、構図なりモチーフ選択に光吉画がその基本にあることが調査から辿られた。土佐派の源氏絵の基本となる光吉源氏絵が流派を超えた狩野派にも用いられるほど浸透していたこととともに、狩野派がそれを基にしてアレンジを行い、流派の源氏絵として整えて行ったこと、そしてその推進者となる絵師が探幽であったことを実証的に考える上で基本的なデータが調査によって得られた。

探幽様式の源氏絵は、狩野養竹筆「源氏物語図屏風」6曲1双（大倉集古館蔵）の各図様の原図として用いられている。図様をほぼ踏襲した描写は、探幽様式の源氏絵の影響を明示するものである。さらに同図様を有する「源氏物語図屏風」6曲1双の内、左隻の存在をヨーロッパにおいて確認している。この作品については本研究補助費による成果ではないので詳しくは触れない。

今後は、探幽様式の源氏絵を継承した狩野派の源氏絵が、屏風に代表される大画面と色紙に代表される小画面双方の画面形式を含めて、江戸中期以降の土佐派の絵師、例えば光成ほかの源氏絵や、狩野派や土佐派の筆法の特徴を会得した町絵師による源氏絵、あるいは海北派や琳派など他の流派の源氏絵と、どのように個別化をはかり、存続手段を講じていったのか、それらの作品の購買層や絵師たちの支援者なども視野に入れて、江戸時代中期以降の流派別の源氏絵展開に考察を進めるために、調査研究を継続したい。

（研究対象作品）

狩野探幽筆「源氏物語図屏風」宮内庁三ノ丸尚蔵館蔵  
伝狩野探幽筆「源氏物語画帖」和泉市久保惣記念美術館蔵

（探幽様式源氏絵作品）

狩野養竹筆「源氏物語図屏風」大倉集古館蔵 ほか